
春が来ました

藤井ハル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

春が来ました

【Nコード】

N3054T

【作者名】

藤井ハル

【あらすじ】

いつもの帰り道に春の訪れを知り、大切な人を想うという様な短なお話です。

目測を誤った。

近頃は大分陽が延びたとは言え、夕焼けは遠く西の空に余韻を残すだけ、グラウンドを照らすライトは部員の影を幾つもの方向に伸ばしていた。放課後の練習最後のシート・ノックは男子部部長の村上がサードから時計回りの順番で打ち込んでいつて、スムーズにファーストへ送球できた者から練習を終えていくのが慣例だった。

「ハイ、次セカーンツ！」

シヨートを守る二年の竹中が流れるように送球すると、間髪入れずにユキの守る一二塁間へ鋭い打球が打ち込まれた。

ボールはピッチャーズ・サークルの横で勢いよくバウンドした。ユキは次のバウンドに入る前にグラブに収めてしまおうと低い腰のまま前進すると、あるうことがボールをグラブの土手で弾いてそのまま顔で受けてしまった。

ギャツ、と短く叫んで転がって、瞬時にグラウンドが凍りついた。

「大丈夫っ?! 誰か冷却スプレー!」

女子部の部長の竹中が直ぐに飛んできて、焦った声でどこ当たった? と聞くのが聞こえて目を開くが覗き込む顔もぼやけてよく見えない。

「あ、眼鏡……。」

幸いボールは眼鏡のフレームに当たって頭もどこも大した痛みは感じなかった。それよりも、エラーをした事とあらぬ声を上げた事が恥ずかしかった。

「先輩、大丈夫です、体には直接当たりませんでした。眼鏡が吹っ飛んだだけで……どこも痛くないです。」

「本当? いずれにしても今日はこれで練習終わりにしましょう。いいよね、ムラカミ君。」

駆け寄ってきていた村上も心配そうに覗き込む。

「ホントに、平気か？取り敢えず保健室行った方がいいよ。」

「大丈夫です、本当に。少し休んでこのまま帰ります。」

「帰るって、家どこだっけ。」

沢ノ井です、と答えるとそんな遠いのかと驚かれた。

「いつもは自転車で通ってるんですが・・・。」

村上は親に迎えに来てもらえと言うけれど、多分今日は仕事で遅いのだと伝えるとそれなら家の方向が同じ部員に送ってもらえるということになった。

「沢ノ井だつたら・・・。あ、大井先輩ってそっちの方じゃなかったでしたっけ。」

そう言つて竹中が振り返ると、グラウンドにいる中で唯一の三年の大井はああいいよ、と手で合図した。

そのままそこで皆で輪を作つて短い反省会を済ませると、それぞれ用具の片付けに散つていった。

「ユキは片付けいいから、もう着替えて様子見て大丈夫そうなら大井先輩と帰って。」

そう言われるままに、ユキはグラブにフレームが折れ曲がつて右目のレンズの取れた眼鏡を収めて更衣室へ向かった。

外はまだ冷たい風が寂しい枝を揺らす季節だというのに、更衣室は夏と同じ制汗スプレーと部活後の若者たちの臭いのせめぎ合うむせかえる空気で満ちている。机の上に散らかった衣類やカバンの山から自分の荷物を掘り出してから、群青のウィンド・ブレイカーを脱ぎＴシャツを丸めて部活用シヨルダーの中から手探りで引つ張り出したビニールの洗濯袋に放り込む。そしてグラブから壊れた眼鏡を取り出し、少し考えてからマアいいや、とそのＴシャツにくるんで袋と一緒にシヨルダーにしまい込んだ。

（明日の男子部のヘルプは行けないな。あ、眼鏡が無いとそれどころじゃないか。あ、それより授業とかどうしよう。）

そんな事を考えながらセーラー服を被つてカーディガンのボタンを

はめ、黒いタイツとスカートを着け真つ赤なマフラーをぐるぐる巻いて下足室へ向かうと誰かが待っていて、近づいてよく見ると大井だった。

「お待たせしてしまいました、先輩。」

言いながら小走りする。

「あ、あの、私一人で帰れます。どこも痛くないですし、自転車も押して街灯伝いに帰るだけなので・・・。」

「同じ方向だから、いいよ別に。もう暗いし、目、何も見えてないんだろ。」

ありがとうございます、と恐縮しつつユキは腰を屈めて自分の真つ赤な自転車を探し出し、顔を近づけスカートのポケットから取り出したキイを挿し入れた。

ユキらの通う高校は川沿いの市道とその川を跨ぐ県道の大橋の交差するところにあつて、海岸へも歩いて十分程度で出られるから、仲良し同士や恋人同士は休みや放課後には連れ立って浜辺で遊んだり夕陽の沈む海を眺めたりするのがこの街の「黄金パターン」だった。ユキも仲の良かった姉と一緒に昔はよく海岸で遊んだりしたものだつた。今でも海風が磯の香りを連れてくると、その頃の事を思い出す。

高校へ進んで、都会の大学へ行こうと腰を入れて勉強しようと決めたユキをソフトボール部に誘ったのは、一つ上の竹中だった。彼女は中学でもソフトボールをしていて、当時別の中学で対戦相手だったユキが下の学年に入ってきたと知って驚いて、しかもソフトボールを辞めていると聞いてなお驚いて、（と聞かされたが、本当は女子部が冬の三年生引退後には九人を割るので部員集めに必死だったと入ってから知るのだが）半ば強引にユキを部に引き入れたのだった。ユキはユキで、しつこく誘われた事に加えて、休み前の試験で入学時点の決意虚しくひどい点数をもらってあっさりと宗旨替えしてしまったのだった。それが去年の夏休みに入った頃だから、六月

の県大会を最後に引退し受験生活に突入した三年の先輩とは本当なら直接は関わる事もなかったはずだった。

ふと、強い風がゴウーッと通り抜けて、不意に身をすくめた拍子に道の窪みに突っ掛かってよろけてしまった。

「つと、大丈夫？」

「はあ、はい。すみません驚きました。」

「やっぱり危ないね。自転車、俺が押すよ。」

そう言うで大井はハンドルを無理矢理取りそのまま押し始めた。

「でも正直笑えたね、悪いけど。」

え、何がですか？と聞き返しながら、ハンドルを取り返す機を逸しと思った。

「いや、ホラ。ボールがぶつかった時の杉村の叫びだよ。ギャツて、グラウンドに響いていたよ。ギャツて。」

吹き出しそうになりながら大井は、あれはこれから当分思い出し笑いの筆頭だと言った。

「そんな、可笑しかったですか。うわあ、もう、恥ずかしい……。」
それからしばらくは、会話もなく、黙って歩いていった。二年離れた男子部の先輩となんて特に共通の話題もないのだ。自分が入部する前に引退したものの、何故か大学受験を止めてソフトボール部に顔を出しては後輩の練習を手伝ったりちよっかいを出したりしている人だ、という程度の認識で、これまでも会話もしたことのない先輩だったのだ。沈黙に耐えきれない、と思い必死に話題を探すけれど特にこれと言った話題も見当たらず、黙って片手でサドルの下のパネに指を掛け大井に付いていくしかなかった。

仕方無しにメガネ無しに見送る夜の帰り道は、いつもよりキラキラしているとユキは思った。灯りという灯りが丸くぼやけて、街灯や追い越していくバイクのテール・ランプやハザード・ランプ、建ったばかりの団地のおびただしい数の通路灯、どれもこれも新鮮に映

って思わずきよろきよろしてしまう。それらを見ながら歩いていると、丸くぼやけた灯りをどこかで見たことがあるような、妙な感覚になった。そうして、記憶の中から似た様な画を探して探して、理科だか保健体育の教科書で見た卵子の顕微鏡写真だ、と思い当たった。一度そう見えてしまうと、もうそのようにしか見えなくなってしまうからいけない。

「・・・杉村は、赤、好きなの？」

十五分位黙ったまま歩き続けて、突然大井が聞いた。

え、どうしてですか、と聞き返すけれど、何の文脈もなくそう聞く意図が分からない。話題が何もないからって、そう言う事を聞くものだろうかと思った。

「ほらさ、チャリも、襟巻きも赤じゃない。練習の時のＴシャツも、赤の時間が多くないか。」

「そんなに、目立ちますか？」

「いや、全然今まで気付かなかったんだけど、さっきチャリ置き場で自分の探してた時、ああ、襟巻きと同じ色だな、って思ってた。で、そう言えばＴシャツも赤のイメージあるなあって思っただけなんだけど。」

そうなんですよ、と少しだけおどけた調子で答えつつ、実のところは関心していた。

「冬、っていうのもあるんですが、まあこんな時代・・・ですし。

明るい色、選んでみたいなって思ってたんです。」

あとは・・・、刷り込みみたいなものもあると思います、女の子って産着からランドセルから、小さい頃は「取り敢えず赤系」なことが多くて、いつの間にか好きな色になっちゃったんです、とか、この襟巻きも自転車も、実は姉のお下がりなんですよ、などと続けようとして、回りくどいかなと思って頭で反芻しただけで飲み込んだ。大井はそうなんだ、いい考えだねなどと答えるとそのまま会話を続けることなくまた黙ってしまい、余計に何だか居られない気持ち

になった。

見えないながらも目は辺りの薄暗さにも慣れてきて、真つ黒な稜線と空の境目位は分かるようになってきていた。丁字路を右に曲がるとあとは山へ向かう一本道で、その山を背負う様に建つユキの家ももう直ぐそこだった。

「あ、あれは……」

思わず声が出てしまつて自分でも驚いた。毎日自転車で往復している道なのに、妙に見慣れない物が目に入つたのだ。白。いや、赤……だろうか。目をキューつと細めて見る先に薄ボンヤリと、家へと続く道の向かつて左側に一列の薄赤い帯の様な物が見える、気がした。「あれ、つて。」

大井は歩をキツと止めてユキの方を振り向いた。

「あの……左に薄く赤でしようか、の帯みたいなのが見えるんですが、ボンヤリしていて何なのか分からなくて。済みません、急に。声を上げる様な事でもないですね。」

「ああ……」

そう声を漏らして、大井はまた少しだけ黙つてから続けた。

「薄赤い帯か。眼鏡がないとそう、見えるんだね。あれは、ムメの花だよ。淡い紅色をした、ムメの木が並んでいるんだ。」

ムメ？音が意味を帯びるまで少しの間を要した。何となく、梅の木の事を言っているんだろうなと思つた。

「今年も、春が来たんだね。良かった、本当に良かった。ムメは春を知らせる花だから。実はね、死んだ兄が好きだったんだよ。」

「……お兄さんが、いらつしやったんですね。」

それ以上は聞けなかった。ユキはグルグル巻きの赤い襟巻きを左手でギュツと握つた。

「春の花、と言えばきつと殆どの人は桜を想うよね。でも兄は、ムメの花こそ本当の春の花だ、とよく言っていたんだ。本当かどうか知らないんだけどね、桜は下を、僕らの方を向いて咲くけれど、ム

メの花は上を、僕らと同じ方向を向いて咲くんだって。春、四つの季節の始まりは上を向いていた方が似合っているって言うのは、僕もそう思うんだ。」

最後の方は独り言のように聞こえて、ユキはハツとしながらも小さな相槌を打つ事しかできなかった。

家はもうこの辺なの、と聞かれて、あの、突き当たりの平屋ですと指を指すと、

「じゃあ、もうちょっとだ。」

そう言つて大井は梅の向く方を眺めながら自転車を押し始めたので、ユキもそれに引っ張られてまた歩きだした。

目を閉じて、薄紅の帯が脛に浮かぶ気がした。ああ、これを辿れば家に帰りつけるんだ、と思った。あ、それじゃ先輩にもう帰れますつて言つた方がいいか。そう思つたけれどまあ、いいかと思ひ直した。

「去年と同じ香りだ。うん。香り、っていうのは何だが、いろいろな事を思い出させる。」

大井の言葉は最早殆ど聞き取れない程の呟きだった。

香り、か。気にも留めなかったけれど、確かに花の香りがする。これが梅の花の香りなんだ。

今までユキが何も意識した事すらなかったこの香りに、大野は何を思い出しているのだろうか。亡くなったお兄さんと一緒に過ごした日々を思い出しているのだろうか。

鼻から胸いっぱい満ちる香りに包まれて、そうして薄赤い帯に導かれる様に、ユキは自身の姉の事を想つた。そうしてきつと、これからこの花が咲く度に、その香りに気づく度、姉の事を想い出すだろうと思ひ、ぼやけて色と香りしか判らないムメの花を見上げた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3054t/>

春が来ました

2011年5月19日09時52分発行